

よみがえる「池田城」の興亡



池田城主郭想像復元図

4/1 城跡公園 オープン

平成7年度から始まった池田城跡公園の整備は、今年3月末に完成。4月1日に、「市民の憩の庭園」としてオープンします。櫓風展望休憩舎を中心に庭園が広がる城跡は、かつての中世の城、池田城の栄枯盛衰を物語るドラマの舞台です。オープンを先立ち、今号と3月1日号の2回にわたり、その池田城の興亡を紹介します。

1 池田城はいつできたのか

池田城の名が登場する最古の史料

池田城はいつ築かれたのか、今のところ、これについて書かれた史料はありません。『新修池田市史』第1巻で、池田城の名が登場する最古の史料として建武3年(1336)「平国茂軍忠状」を挙げています。この「軍忠状」には、後醍醐天皇の南朝方と足利尊氏の北朝方とが対立した南北朝の内乱の時、北朝方の芥河岡国茂の軍勢が、「池田城にて数日送」って夜詰めをしたという記述があります。この記述から、1300年代の前半、すなわち南北朝時代に池田城が存在していたのではないかと、いわれています。しかし、この時期に池田城の存在を認める場合、果たして、現在、城山町の台地上にある池田城跡を指しているのか、以下の点で疑問があります。

池田城跡公園竣工記念イベント いけだ新能/市民発表会へのお誘い

池田城跡公園の開園を記念して、5月20日(土)午後6時から同公園特設ステージで「いけだ新能」を開催します。それに先立つ同日の昼間、「謡曲」「仕舞」に親しまれている皆さんの発表会を行います。ご応募ください。

とき 5月20日(土) (雨天は21日) 午前11時～午後4時
ところ 同公園特設ステージ 発表内容 連吟、仕舞など 費用 3000円 (仕舞は別途費用が必要) 申し込み 曲目、出演希望者の氏名、住所、年齢とグループの代表者を書いて、郵送またはFAXで同公園竣工記念イベント実行委員会事務局(〒563-0056 栄町1-1、阪急池田フランチエ3番館、(財)いけだ市民文化振興財団内、☎50-3333、☎50-3330)

ア 南北朝時代の内乱は北朝方対南朝方といった広域戦で、自分の領地を守るための戦い方ではない。したがって、城は千早赤阪城(千早赤阪村)のように山深い、しかも山頂や尾根づたいに築かれるものが多く、池田城のように街道や集落に接し、簡単にその存在が認識できる場所に築かれる例が見られないこと。

イ 芥河岡氏の軍勢が夜詰めをしたというのであれば、ある程度の面積と防御機能(あるいは要害に含む)を有した城であると考えられるが、池田城の城域が拡大され、防御機能が高められるのは、発掘調査によれば1500年代になってからと推定されること。

図1.池田城の変遷



こうした点から、建武3年の「軍忠状」に登場する池田城は、今私たちが認識している池田城跡ではなく、もしかしたら五月山山頂のどこかに城が築かれていたのかもしれない。前掲の『池田市史』でも場所について触れていないのはこのためと思われる。

現在の地に築城

池田氏は、勝尾寺（箕面市）蔵『勝尾寺文書』によれば、1200年代後半に現れ、しかもその本拠地が「呉庭荘」であったと推定されています。当時は「藤原」の氏名を持っており、釈迦院（鉢塚2丁目）の宝篋印塔を建てた藤原景正も池田氏の一族と考えられています。この池田氏は南北朝時代のころから力を付けはじめ、1300年代の半ばには勝尾寺の檀家になっていいることが分かります。ただし、檀家衆の土豪30数人の中の一人として挙げられており、必ずしも抜きん出た存在ではなかったようです。また、摂津国守護赤松氏の家来になっていたことも分かっています。その後、どのような過程で成長を遂げたのか不明ですが、『勝尾寺文書』の永享8年（1437）「歳末巻教賦日記」（願主のため

に読誦した経文や度数を記して送った文書の控え）では、10人程度に固定化されており、80数年間の間で、土豪30数人から10人程度に淘汰され、池田氏はその中に残っていることが分かります。おそらく、このころには、支配領地が広がって国人（各地の、小規模な領地を支配した者）として成長し、支配の拠点として館を構えるまでになった、すなわち、1400年代の前半には、現在の池田城跡の場所に館を築いたのではないかと推定されます。永享8年以降、池田周辺の領地の侵略を企て始めていること、応仁元年（1467）に始まった応仁の乱の時、室町幕府の有力者で摂津守護細川氏の家来になっていること、文明元年（1469）の史料に池田城という名が登場していることなどがこの推定を補強するものと思われる。

2 池田城の構造と変遷

池田城が築かれた場所

戦国時代以前の城は、できるだけ崖、谷、

川などといった自然の要害をうまく利用して築きます。池田城の場合も、城山町の台地と平野部との境にできた崖、杉ヶ谷川による谷を利用し、一部堀を掘って築いています（図1の①）。城の周りすべてを堀で囲むより少ない労力で済み、また、崖、谷を利用する方が、堀以上に防御の効果が期待できるのです。ただ、この場所は重大な欠点があります。後方の五月山からは、城の中が丸見えになり、攻撃する側から見れば、池田城の中の防御の様子を手取るように分かります。事実、後述しますが、永禄11年（1568）織田信長が池田城を攻撃するとき、後方の山に陣を敷いたと『信長公記』に記されています。

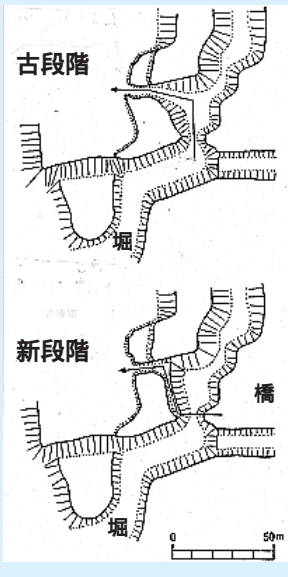
最初に築かれた姿

現在の池田城跡の場所に築かれたのは1400年代の前半ごろと紹介しましたが、最初は（図1の①）のように、主郭部分（城の中心・本丸に相当する部分）と小さな曲輪（堀・土塁などで画された平坦部分）が取り付いただけの小規模なものでした。主郭の中には枯山水風の庭園（写真右）が造られ、単に城に籠るだけのものではなく、生活の場所であったことを示しています。文明19年（1487）の『政覚大僧正記』によれば、政覚ら僧侶一行が有馬から帰る途中に池田城を訪れ、庭園を見て驚いたと記されています。



庭園

図2. 虎口の変遷



この城の防御機能が発達し、また、城域が拡大するのは、文明元年(1469)以降、数々の攻撃、あるいは落城を経験していく過程でのことでした。池田城が最初に落城したのは、応仁の乱が起り、池田氏が東軍の細川方の家来であったため、文明元年、西軍の山名方についた大内軍に攻められてのことでした。もともと、この時はすぐに奪回し、城の被害はなかったようです。城が大きな被害を受けたのは永正5年(1508)、細川方が分裂して細川澄元と細川高国が争った時、池田氏が澄元についたため、細川高国の攻撃を受け落城した時です。発掘調査で、この落城による炭層・焼土が主郭に厚く堆積していることを確認しています。永正5年の落城後、城を復興する際、主郭の堀を広げるとともに、周りに土塁を設け、また、主郭のさらに外側にも堀を掘って防御機能をより高めています(図1の②)。永正5年の落城の後も、享禄4年(1531)の細川高国による再攻撃による落城などで改修の手が加えられたものと考

城の改修

街道を城内に取り込む

織田信長は永禄11年、足利義昭を擁して上洛、細川氏没落後、摂津に勢力を張っていた三好氏を討伐するため攻め入りました。摂津の国人たちは信長に寝返りましたが、池田氏は籠城して抵抗しました。しかし、町・城に火をかけられて降伏し、信長の家来になりました。

家来になり、城を改修する時、信長方の築城に用いられていた虎口(入り口)を採用しました。信長方の築城で用いられていた虎口は、城の中へ入る道を2度曲げるもので、それまでの池田城の虎口は1度だけ道を曲げるものでした(図2)。この時の改修で注目されるのは、城内に街道を取り込んでいることです。城の中に人が往来する街道が通っているという点、少し変に思われるかもしれませんが、戦の時に街道を封鎖し、敵の往来を防ぐことが可能になります(この街道が城中に入る個所でも道を2度曲げている)。ただ、街道を取り込む時期は、池田氏の段階が、後に台頭する荒木村重の段階が、今のところ明らかではありません。

主郭の中の様子

永禄11年、落城後の主郭内部の改修の様子が、発掘調査で明らかになっています(想像



建物跡と排水溝

図参照。

主郭中央には、平面が約10m四方の主殿を中心、これより小さい建物や倉が取り付いています。建物の周囲には雨水を処理するための排水溝(写真右)があり、暗渠で堀の中に流れるようにしています。主郭の北・東・南には土塁、西側には柵が設けられています。虎口は、それ以前は堀底から斜面を上がって内部に入る形態であったものから、南東隅を橋で渡る形態へと変えています。

城といえは、大阪城や姫路城のように石垣を持ち、天守閣や隅櫓といった建物をもつ近世城郭が想像されがちですが、池田城は近世城郭として発達する以前の、素堀や土塁に囲まれ内部に屋敷を持つ、戦国時代に一般的に見られる姿をしていました。 続く

問い合わせは社会教育課(☎54・6295)